

子育て広場における学生教育との接続 ～親子との関わりへの課題に焦点をあてて～

An attempt to link junior college student education and Kosodate Hiroba (parenting support)

～Focusing on Challenges of junior college students’ child-parent relationship～

森下 順子

要 約

本研究の目的は、本学の子育て広場に、ボランティアスタッフとして参加した学生が、保護者と子どもに関わった体験の自己評価を分析することである。結果、5段階評価は、子どもとの関わりの方が保護者との関わりより高い結果であった。また、学生292名の自由記述を活用した量的分析の結果は、子どもとの関わりについては直接的なふれあい体験が達成感や充実感となっていることが伺えた。保護者との関わりについては、子どもを媒介としては関わられたが、子育ての深い部分までの話ができなかったことが、自己評価を低くした可能性があることが示唆された。今後の学生教育の向上のための課題としては、グループワークなどで保護者と学生が語り合う場や機会があることが、望ましいと考える。

はじめに

本学における子育て広場は、平成21年5月からスタートし9年目を迎えた。基本は毎月1回土曜日の午前中に体育館にて開催している。参加対象者は、乳幼児を持つ保護者とその子どもである。スタッフは、学生、和歌山市子育て支援センターなかのしまの専門保育士、保育科教員、平成25年度からはCOC事務補佐員も加わったメンバーで活動している。学生スタッフは、1年次の必修科目「ボランティア論」の授業の一環として位置づけられ、子育て広場に1年間に1回参加することが課せられている。もちろん自主参加も積極的に促し、毎回自主的に参加する学生もいる。

子育て広場の内容は、保育プログラムと自由遊びが主であ

る。専門保育士が中心となり、手遊び・絵本の読み聞かせ・歌遊びなどの保育プログラムを行っている。保育プログラムの中で、学生が予め練習を重ねた手遊びなどを親子の前で実践する機会も設けている。自由遊びについては、本学体育館を使用して、ボールや平均台、子ども用バスケット、大型積み木、フラフープ、トンネルなどで自由に遊ぶことができる。学生にとっては、子どもとふれあえる、保護者とコミュニケーションがとれる機会でもある。

1.57 ショックを契機として、平成6年のエンゼルプランを皮切りに様々な子育て支援に関するプランを国は打ち出し、社会で子育てができる環境づくりを目指して取り組んでいる。平成27年には、子ども子育て支援新制度が始まり、今後子育て支援の充実が加速することに期待したい。子育て広場に参加

する現在の学生は、平成生まれである。つまり、上記のように子育てが困難といわれ、少子化や核家族化、地域のコミュニティーが希薄となり、孤立した子育てが問題となっているさなかに、子ども期を過ごしていることになる。現在の多くの若者は、コミュニケーション能力が低いともいわれ、また保育者を目指す学生でも、乳幼児やその親世代と触れ合う体験が不足しているのが現状である。そのため、子育て広場の親子との交流を通して、コミュニケーション能力を高めるきっかけとしたいと考えている。

本研究では、学生自身が子育て広場を体験して、親子との関わりをどのように自己評価しているのかを明らかにする。これらを分析することにより、学生のコミュニケーション能力を高めるための子育て広場の今後の在り方を示唆できると考える。

方法

1. 調査概要

調査は、平成26年度、27年度、28年度の保育科1年生のレポート及びアンケート調査より抽出した。子育て広場の参加後にそれぞれの学生が記入し後日提出された。

2. 調査項目

- ・子どもと関わる事ができたか
 - ・保護者と関わる事ができたか
- の2点について、5件法で実施した。
また、それぞれに自由記述を求めた。

3. 調査対象

保育科1年生 平成26年度106名、平成27年度104名、平成28年度82名 合計292名

4. 分析方法

・5件法・・・評定平均値で比較する
・感想・・・感想から傾向をつかむために、計量テキスト分析を行う。計量テキスト分析とは、計量テキスト分析法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析(content analysis)を行う方法である。計量テキスト分析を採用した理由は、①テキスト型データを客観的に把握することが可能であること、②客観的事実を踏まえたうえで、分析者の理論仮説や問題意識に基づいたコーディングルール作成を重視してい

ること、以上2点による。実際の分析には、フリーソフト「KH Coder」を活用した。

結果

1. 5件法

学生による自己評価の結果は、「子どもとの関わる事ができたか」については、評定平均値は3.90、「保護者と関わる事ができたか」については、評定平均値は2.78であった。子どもとの関わりの方が、保護者との関わりより平均値が1.12高い結果となった(表1. 図1. 図2)。

表1. 子ども・保護者との関わり評定値

	子どもとの関わり	保護者との関わり
5できた	77	26
4	127	53
3	69	81
2	19	93
1できなかった	0	38
無回答	0	1
n	292	292
平均値	3.9	2.78

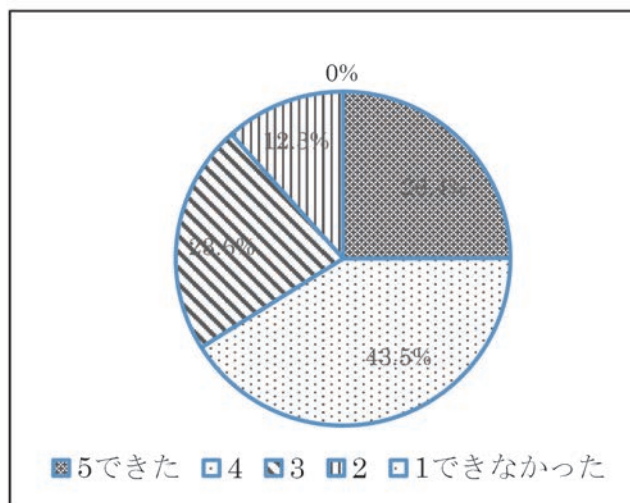


図1. 子どもと関わる事ができたか

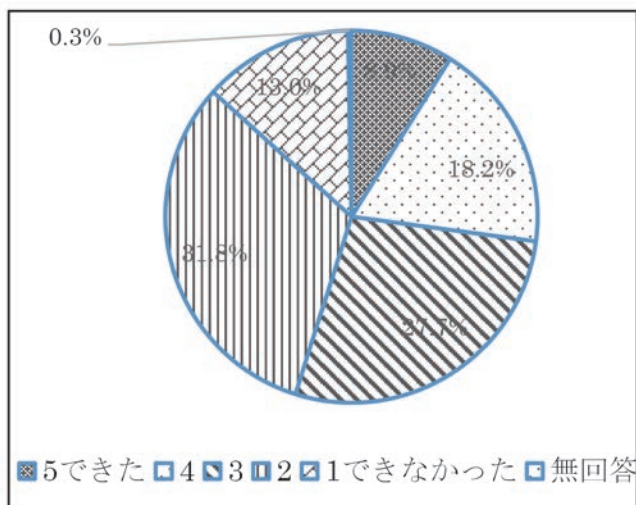


図2. 保護者と関わる事ができたか

2. 自由記述より

(1) 子どもと関わる事ができたか

・頻出語 150 について

「子どもと関わる事ができたか」について、出現回数の多かった頻出語は、子ども (186 回)、子 (144 回)、歳 (141 回)、遊ぶ (140 回)、関わる (129 回)、ボール (122 回) であった。

表3. 子どもとの関わり頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	186	大きい	14	返す	6
子	144	作る	13	木	6
歳	141	話す	13	遊べる	6
遊ぶ	140	ハイハイ	12	遊具	6
関わる	129	違う	12	援助	5
ボール	122	座る	11	活発	5
一緒	62	保護	11	感じる	5
遊び	60	話	11	関	5
女の子	46	トンネル	10	頑張る	5
積み木	42	バスケット	10	近く	5
男児	34	好き	10	繰り返す	5
男の子	33	初め	10	合わせる	5
思う	30	小さい	10	最初	5
女兒	30	積む	10	接す	5
ブロック	29	走る	10	全く	5
お母さん	28	電車	10	渡す	5
人見知り	28	元気	9	年	5
多い	27	高い	9	発達	5
自分	26	手遊び	9	表情	5
喜ぶ	25	抱く	9	保育	5
嬉しい	25	来る	9	母親	5
少し	25	顔	8	遊び方	5
歩く	25	姉	8	様々	5
見る	24	示す	8	理解	5
才	24	上手	8	離れる	5
笑う	24	親	8	その後	4
笑顔	24	積極	8	クッション	4
年齢	23	難しい	8	スポンジ	4
出来る	22	目	8	バスケットボール	4
転がす	22	近づく	7	プログラム	4
ゴール	21	形	7	挨拶	4
手	21	時間	7	隠れる	4
声	20	主	7	横	4
抱っこ	19	走り回る	7	会話	4
行く	18	乳児	7	壊す	4
使う	18	入る	7	掛ける	4
赤ちゃん	18	聞く	7	関わり	4
分かる	18	様子	7	丸い	4
話しかける	18	ハイ	6	寄る	4
興味	17	楽しむ	6	帰る	4
言う	17	呼ぶ	6	居る	4
入れる	17	最後	6	後ろ	4
楽しい	16	終わる	6	行う	4
泣く	16	上	6	今	4
投げる	16	前	6	参加	4
たくさん	15	恥ずかしい	6	指	4
言葉	15	追いかける	6	集中	4
持つ	15	途中	6	上手い	4
平均	15	膝	6	乗る	4
バランス	14	不安	6	城	4

・共起ネットワーク（出現回数10回以上の話）

共起ネットワークとは、頻出語の出現パターンの似通ったものを線で結び、共起関係を線で表した図である。

「子どもと関わることができたか」について、行動面に焦点をあてた結果、主な結びつきは、「子ども—一緒—ボール—遊ぶ—関わる」「積み木—積む」「フラフープ—電車—使う」「バスケット—入れる—ゴール—喜ぶ」「笑顔—話しかける—話す」「人見知り—泣く—赤ちゃん—抱っこ—座る」などであった（図3）。

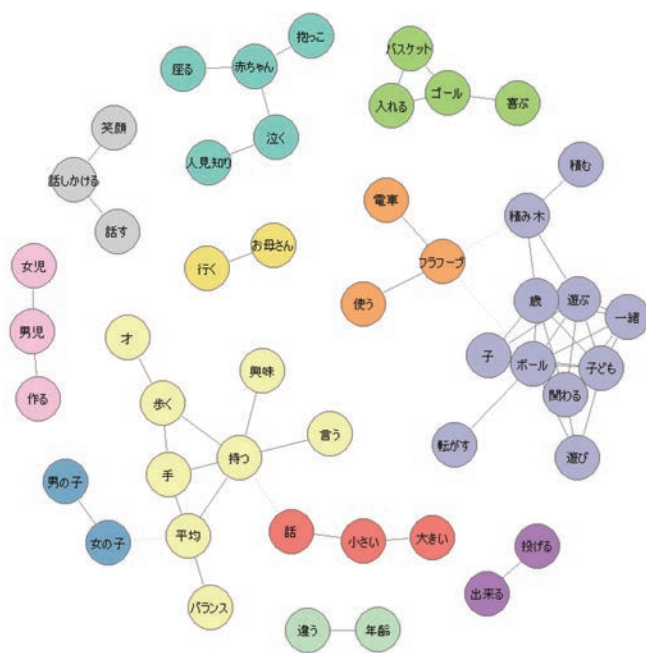


図3. 子どもとの関わりについて共起ネットワーク

(2) 保護者と関わることができたか

・頻出語 150 について

「保護者と関わることができたか」について、出現回数の多かった頻出語は、保護（250回）、子ども（204回）、関わる（105回）、話（103回）、思う（102回）であった。

表4. 保護者との関わり頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
保護	250	考える	10	終わる	5
子ども	204	多い	10	状況	5
関わる	132	お話し	9	色々	5
話	105	楽しい	9	色々	5
思う	103	感じる	9	親子	5
話す	102	今	9	続く	5
話しかける	78	時間	9	男の子	5
聞く	68	遊び	9	難しい	5
自分	57	言葉	8	方	5
遊ぶ	57	好き	8	方々	5
出来る	54	初めて	8	目	5
お母さん	52	親	8	遊べる	5
少し	51	人見知り	8	話し掛ける	5
言う	39	赤ちゃん	8	話題	5
会話	37	全く	8	もう少し	4
子育て	37	大切	8	アナ	4
子	31	男児	8	帰る	4
次	31	入る	8	気持ち	4
積極	30	年齢	8	元気	4
一緒	29	勉強	8	広げる	4
挨拶	28	保育	8	今日	4
声	28	お父さん	7	困る	4
分かる	25	案内	7	残念	4
見る	23	課題	7	使う	4
お話	21	見守る	7	子供	4
関	21	最後	7	事	4
広場	21	歳	7	自ら	4
機会	20	持つ	7	自由	4
参加	20	笑う	7	手	4
人	20	他	7	小さい	4
大変	20	必死	7	少ない	4
来る	20	不安	7	場	4
たくさん	19	普段	7	場所	4
嬉しい	19	誘導	7	情報	4
質問	19	ボール	6	深い	4
受付	18	気	6	世間	4
聞ける	18	近く	6	精一杯	4
今回	16	初め	6	走り回る	4
次回	16	女の子	6	対応	4
様子	16	仲良く	6	答える	4
あいさつ	15	内容	6	動く	4
行く	15	抱っこ	6	反省	4
話せる	15	良い	6	母親	4
関わり	13	トンネル	5	本当に	4
教える	13	一言	5	木	4
緊張	13	下	5	預ける	4
家	11	泣く	5	幼稚園	4
笑顔	11	係	5	連れる	4
成長	11	今後	5	いろいろ	3
コミュニケーション	10	姿	5	アンパン	3

・共起ネットワーク（出現回数10回以上の話）

「保護者と関わる事ができたか」について、行動面に焦点をあてた結果、主な結びつきは、「大変ー子育てー広場ー来るー言う」「家ー様子ー聞ける」「笑顔ー挨拶」「子ー遊ぶー一緒ー見るー出来る」「話ー聞くー関わるー子どもー話しかける」「次回ー参加」などであった（図4）。

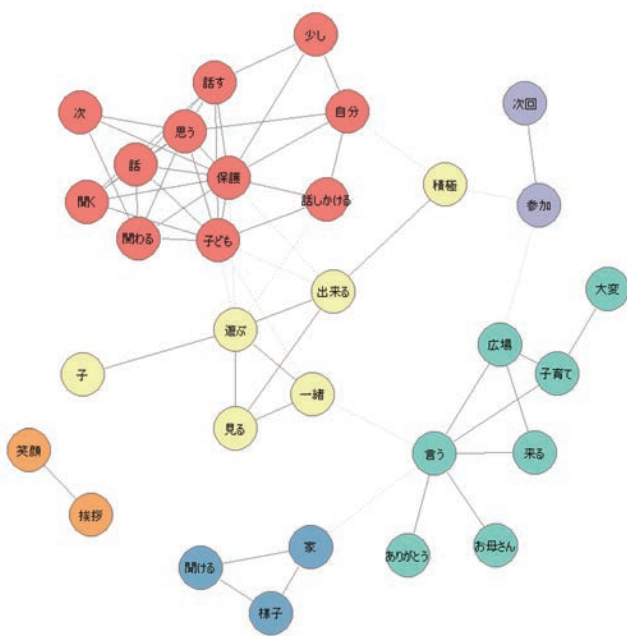


図4. 保護者との関わりについて共起ネットワーク

考察

本研究では、学生自身が子育て広場を体験して、親子との関わりをどのように自己評価しているのかを明らかにすることであった。そして分析結果をもとに、子育て広場を活かした学生教育の向上のための今後の課題を検討し考察にぐわえたい。

学生による5件法による自己評価は、子どもとの関わりが、保護者との関わりより自己評価が高い結果となっ

た（表1. 図1. 図2）。たいていの学生は、子どもが好きという理由で保育者になることを目指している。子育て広場においては、自由遊びの時間に、子どもの発達や遊びの興味に寄り添い自由に子どもとふれあうことができる。学生にとって子どもと一緒に遊べたことが、関わられたという評価につながり、平均値が高い結果となったと考えられる。

一方、保護者との関わりについては、平均値が子どもとの関わりと比較すると低い結果であった。保護者支援については、保育所保育指針や幼稚園教育要領にも挙げられ、保育者の役割が期待されていることは講義等で、学生は理解しつつあるが、実際の子育て広場で、何を話してよいのか悩み相談に来る学生がいる。その結果、コミュニケーションをとりたい気持ちはあるが、どうしてよいかわからない、もしくは話が深まらず、学生の自己評価が低くなった可能性がある。

共起ネットワークによる分析結果より、子どもとの関わりと、保護者との関わりについて、特筆的なネットワーク群について考察する（表3. 表4. 図3. 図4）。

子どもとの関わりについては、ボール、フラフープ、積み木などの遊具を媒介にして子どもと遊べたこと、また子どもと喜びを共有できたことや、人見知りして泣く赤ちゃんを抱っこするなどの直接的体験ができたことが、充実感や達成感につながっていることが伺える。

保護者との関わりについては、親子と一緒に遊ぶ体験ができたことや、子どもと関わりながら保護者に話しかけたり聞いたりできたこと、笑顔で挨拶する直接的体験はできたとして自己評価されている。しかし、保護者の子育ての悩みや負担感を聞いたり共感するという深い部分の関わりがほとんどないことから、自己評価が低かったことが伺える。

平成30年に改訂される保育所保育指針等には、保育所を利用している保護者や地域の保護者等に対する子育て支援が求められている。上記のような親子との体験は、ステップ1として大切な体験である。しかし、子育て支援として、もう一步踏み込んだ関わり、例えば保護者に子育ての悩みや負担感を直接聞くという体験を得られるようなステップ2があることが、子育て支援において学生教育の更なる向上につながっていくのではないかと考える。そのためには、保護者と学生が、子育てについて

語り、学びあえるようなグループワークなどの機会があることが望ましいと考えられる。

地域貢献として大学が発信する子育て支援と、学生教育の接続を検討しながら、地域が元気になり、学生が学び、感じ、子育てに理解がある保育者として社会で貢献できるように、子育て広場の在り方を今後も検討していきたいと考える。

参考文献

- 岡澤哲子・清水益治(2016)子育て支援事業へのボランティア参加学生の学びについて, 帝塚山大学現代生活部子育て支援センター紀要第1号, 49-54.
- 厚生労働省告示第117号(2017)保育所保育指針.
- 瀧口優(2010)白梅子育て広場と学生の地域意識, 地域と子ども学3, 22-27.
- 竹之下典祥・馬見塚珠生(2016)学生の地域子育て支援ひろば実習から得られた保育士養成の課題, 盛岡大学紀要33号, 43-52.
- 松原敬子(2015)子育て支援における学生の育ち, 植草学園短期大学研究紀要第16号, 31-37.
- 無藤隆・塩見稔幸・砂上史子(2017)ここがポイント!3 法令ガイドブック, フレーベル館.
- 森本美佐・小川純子・高橋千香子(2015)本学の子育て支援活動と学生教育との接続, 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要46号, 121-128.
- 森下順子(2012)子育て広場における学生の学びと課題, 信愛紀要第52号, 13-20.
- 森下順子(2013)子育てによる母親の心理的行動的变化と子育て支援, 信愛紀要第53号, 11-17.
- 森下順子・室みどり(2011)大学と地域子育て支援センター連携による子育て広場平成21年度の取り組み, 信愛紀要第51号, 67-73.
- 森下順子・小笠原真弓(2014)子育てサポート研究センター「子育て広場」平成25年度の取り組み, 信愛紀要第54号, 15-19.

謝辞

本研究のデータ分析にあたって、愛知教育大学の厨子健一先生にご協力いただきました。ここに記して感謝の意を表します。